

## 10 ゴツタンに生きる

薩摩、大隅に残る素朴な板三味線『ゴツタン』の名手荒武タミは、明治四十四年二月二十日、今の始良郡福山町に生まれました。

タミは、五歳の時、はしかにかかりました。ひどい熱のため、左目は今にも落ちこぼれそうに飛び出し、右目もふくれあがっていました。母親のクサは、国分市の眼科まで、タミを背負い三か月間通い続けました。二十キロの道らしい道のないすぎ山をいくつもこえ、深い谷におりてはまた登って……。しかし、タミの目は、ぼんやりとかすかに見えるまでにしか、よくなりませんでした。

「もちつと早く手当してやればよかったんだけど……。医者どんに、あと三日早ければ治ったのと言われたど。川や割れ目に落ちないぐらいにはできるけど、元通りにはできないそうだ。タミ、こらえつくれねえ。」

クサは、死ぬまで、くやんではなみだをこぼし、タミにわびました。



昔、国分、末吉、財部、福山などの農村では、小学校を出た女の子に三味線を習わせる習慣がありました。しかし、三味線は高価なので、ほとんどの子供たちは、木で作られた三味線に似た楽器『ゴツタン』で練習をしていました。けいこが始まる三日前の夜、十四歳のタミに、クサは言って聞かせました。

「おまえは目が不自由じゃつて、お母さんが死んでから先が苦勞するだろう。おまえに三味線を仕込んだら、やがては苦勞せずにすむんだからね。一生けん命けいこをしなさいよ。」

(習うんだつたら、人よりたくさん覚えんといかん。) タミは心の中で思い、母の言葉を聞いていました。けいこが始まりました。先生は、どんどん三味線をひき、歌を歌っていくだけで、三味線の持ち方やばちの使い方などいちいち教えてくれません。タミたちは、ただ、先生の手の動きを見て、ポツンポツンとばちをさばき、とぎれとぎれに先生の歌について歌うだけです。けいこ中、タミは先生のそばをはなれず、手の動きをじっと見ていました。また、自分の番でない時も、少しはなれたところで三味線をかかえ、先生の手を見て自分の手を動かしました。

さらに、家に帰ったあともおさらいをしました。タミは、どんどん上手になっていきました。



そして、修了しゅうりょう祝いわいの日になりました。一人一人先生の前に出て、特訓とくくん一か月の成果せいかを披露ひろうする時です。母親たちも娘たちの演奏えんそうを聞いています。一番先にタミが指名しよされました。一緒に習いにいった二つ下の妹は、三曲でしたが、タミは、先生が教えた十二曲を全部覚えていました。「よく覚えたね、タミ。」

帰り道、クサは、何度も同じことを言いました。心から喜んでいる様子が、目の不自由なタミにも母の体全体から伝わってくるようでした。タミは、家のくらしを助けるため、十一歳さいになると、親元をはなれて、赤ちゃんを背負いながら、なべや茶わんを洗あらったり、おしめを洗ったりにして働きました。目の不自由なタミにとっては、大変な仕事です。つらくて母におかえにきてもらおうと思うことが何度もありましたが、(自分から行くといってきたのだ。)と思い直し、がまんして働きました。

三味線を習ってから、ときどきタミは、家のかげや、人の通らないところで、背中せの子をゆすってあやしなから棒ぼうきれを三味線わすのかわりにして、練習をしました。せっかく母が習わせてくれた三味線を忘れ



てはならないという気がしていたからです。

十六歳さいになったタミのもとへ、はがきが届きました。

『おっかんが、病気でねています。タミに会いたいと言っているから帰ってきなさい。』

タミの心臓ぞうは、波を打ちました。砂糖さとう好きの母に、黒砂糖を買い、急いで帰りました。布団ふとんにねている母は、太っていた姿がどこにもなく、タミのかすかにしか見えない目でも、やつれようがはっきり分かりました。それからまもなく、母は、タミのことを心配しなくなりませんでした。

タミは、その後も働き続けました。そして、時間を見つけては、三味線の練習をしました。今の仕事を続けるか、それよりお金のたくさんもらえる三味線ひきになるか迷っていました。

「もう思いきりなさい、タミ。」

母の声を聞いたような気がしました。母は何のために自分に三味線を習わせてくれたのか。はずかしいと思っていたら、これからどう生きていくのかなどと考え、なやみました。でも、なやみ続けたタミは、やっと、三味線ひきになる決心をしました。

タミの三味線の評判ひょうばんはあつという間に広がり、先生としてたくさんでしの弟子を持つようになりました。また、三味線のかたわら、郷土きょうどの楽器『ゴツタン』の指導しどうにも力を入れました。

「おまえは、目が不自由なので、どんな苦勞をするかもしれない。でも『負けて勝て』というこ

とがあるので、どんなことがあってもがまんせえよ。  
そうしていれば、先々いいこともあるんだから。」  
母の言ったとおりでした。

三味線の先生としても名をあげたタミでしたが、子どものころから親しんできた、郷土の楽器『ゴツタン』の奏者<sup>そうしゃ</sup>としても注目をあび、昭和五十二年十月十四日、東京国立劇場ホール<sup>げき</sup>に立つことになりました。荒武タミの落ち着いたよく通る声と、それに寄りそうゴツタンの素朴<sup>そぼく</sup>な音色<sup>ねいろ</sup>がひびきわたり、大歓声<sup>かん</sup>をあびました。『タミよかったね。おまえも立派<sup>りっぱ</sup>になったもんじゃ。』母の声が耳元で聞こえるようでした。

